

雁鳴きてさむき朝の露ならし龍田の山を捫み出だすものは此紅葉をいふなり此歌本萬葉集に出で、下旬春日山を令黃物者もみだすものとあり、凡萬葉集もみぢ用黃葉字、唯一首用紅葉字、第十卷に見えたり、

〔草木育種後編上〕斑葉間道の事

邦俗いさ葉といふもの、古へは是を愛玩する事も聞かず、近來享保の比より世に愛玩する人あり、今はこれを斑入りといふ、戸々愛玩せざるはなし、唐山にいふ斑ありといふ、杜衡の類此にいふ斑入とは互へり、又瑞香の類の葉の周圍に白色なるを銀邊といふ、黄色なるを金邊といふ、玉簪はじりの類、條に筋あるを絲紋また間道といふ、灌園先生云、白色をまろふといふ、黄色なるを黃斑といふ、初黄後白色なるを後ざへといふ、上品なり、春の葉白く斑ありて、秋に至り斑のきゆるを、後くらみといふ、下品なり、又はけめの如くすぢあるをはき込といふ、葉中心にのみあるを、中斑、又中おさへといふ、葉の邊綠色なるを青覆輪といふ、圓くぼやしたるをぼだふといふ、小圓點又細白點あるを砂子といふ、其外千變万化逐件しるすにいとまあらず、都而斑葉は人の癡風なまごの如く、毛のある處に至れば、少年の人にてても白髪となるが如し、斑入は實生よりも生じ、又一枝偶然斑葉になるもあり、自然に出るものなれば、深山にもあるものなりと、又近來荷蘭の説花の雌雄藥あり、雄木雌木ありて、花藥交接の論によりて考るに、譬へば菘或は菜菔だいこんに斑入ありて、又別種の菘菜菔に斑を生せしめんと思はゞ、其菘の花開く比に、斑葉の菘の花粉を振蕩て、實を結びたるを採りて蒔けば、斑いりの奇菘を得べし、喜任部部阿按に、今花戸にいふ處斑入に各の稱呼あり、芽の出る比に赤みあるを紅かけといふ、青葉同様に見え、うらに少し斑の見ゆるをかげふといふ、この品を接木とし、又手入にて眞の上斑となる事あり、又枝に斑ありて、其次の葉は青く、又其次の枝に斑あるをもぐりといふ、金邊きんぺん木毒もどくなど、折々中にすぢの入るをけ込といふ、又木